



則法の妹姉

勝又 桑彦

姉妹の法則

勝又泰彦

《主要登場人物表》

雨宮千秋 (23) 家事手伝い

雨宮春美 (26) 千秋の姉

矢島和哉 (25) 宅配ピザ店アルバイト

SE カンカンとフォークで皿を叩く音

春美 「ちよっと千秋、飯まだあ？ もう、腹減って死にそーなんだけど」

千秋 「うん、もうちよっとで出来るから。待ってて、春美お姉ちゃん」

SE グツグツとお湯の煮える音

千秋 (MO) 「5人前のパスタはさすがに茹で上がるのに時間がかかる。でも、お姉ちゃんのお腹は一刻の猶予も許さない」

SE 皿を叩く音が激しくなる

春美 「もう、あたしが痩せちゃったらどうすんのよ。千秋、分かってる？ これは女の意地を賭けた闘いなの。鶏ガラみたいに痩せた女を良しとするマスコミや世間の風潮をこれ以上のさばらせておくわけにはいかないのよ！」

SE 皿を叩く音が一定のリズムを刻んでいる

M そのリズムに合わせて勇ましい行進曲が流れ出す

千秋 (MO) 「確かにこれは戦争だ。姉の並外れた食欲を満たすために私は走り回った。我が家の台所事情はまさに火だるまだったのだ」

M F O S

SE ストロボをたく音。続いてカシヤカシヤとカメラのシャッター音

カメラマン 「いいね、いいね、そのポーズ。はい、もう少し顔を上げて……いいよ、春美ちゃん。最高！」

千秋 (MO) 「数年前まで、姉はファッション誌のグラビアを飾る結構売れっ子のモデルだった」

春美 「千秋、あんたって本当にあたしの妹？とりあえずそのブクブクした幼児体型どうにかしないと一生彼氏出来ないわよ」

千秋「え……」

千秋（MO）「そう言われてもグーの音も出ないほど姉は完璧だった。子供の頃からスマートフォンで頭も良くて、ちよつと蓮つ葉などところもあるけれど、私には出来すぎた自慢の姉。両親が早くに病死したこともあって、私はその姉をずっと頼りに生きてきた……でも、そんな彼女の、いや、その後の私の人生まで左右する事件が、ある日突然起きたのだ……」

SE バンと雑誌を机に叩き付ける音

春美「編集長、何なんですか、この写真。あたしのウエストがこんなに不自然にトリミングされて細くなって……これじゃまるで宇宙人じゃないですか！」

編集長「ああ、それね……仕方ないんだ。今回の服のブランドイメージは近未来だから」

春美「だからってこんなに細くしなくてもいいでしょ。あたしの体型に何か問題でもあるんですか？ てゆうか、そもそも首より腰が細くくびれた人間なんて存在します？ アリやハチじゃあるまいし」

編集長「いや、ウチの雑誌の内情も考えてくれよ。今、スポンサーにへそを曲げられたら終わりなんだ……向こうがアリって言えばアリ、宇宙人だって言えば、君は地球を侵略する宇宙人なんだよ。長くモデルやってるんだから、そのぐらい分かるだろう？」

春美「そういうマスコミの事なかれ主義が女性本来の美しさをねじ曲げるんです。編集長だってガリガリの鶏ガラ女とグラマーな美女、どっちが好きですか？」

編集長「そりゃ、まあ、個人的にはグラマー……かな」  
春美「ほら、やっぱり」

編集長「ま、とにかく、写真の差し替えは無理だ。今後も仕事を続けたいんなら、君もダイエットして、アリになりきる覚悟を決めたほうがいい」

春美「ほつといてください。及び腰のアリになるぐらいなら堂々としたカバの方が全然マシです。あたしは立派なカバになって女性の本当の美しさを証明してみせます！」

SE ビリビリと雑誌を破く音

編集長「あ、おい、何するんだ！」

春美「長い間お世話になりました。失礼します！」

SE バサッと雑誌を投げつける音

編集長「うわッ！……おい、ちよつと、君！」

S E バタンとドアが閉まる

千秋（MO）「こうして女の意地を賭けた闘いは幕を開けた。姉は女性本来のふくよかな美を追究し、自らカバになる道を選んだのだ」

S E ズズズとパスタをすすする音

春美「うう、ヤバイ……いくら食べてもうますぎて止まらない」

千秋「お姉ちゃん、もつとゆっくり食べないと。いくらなんでも身体に悪いよ」

春美「ほつといてよ。凡人に美の探求者の苦勞が分かるわけないんだから。それとも、あんたまでガリガリ好きの世間やマスコミの味方するわけ？」

千秋「いや、そうじゃなくて……」

春美「そういや、あんた最近痩せたんじゃない？ それって、革命に対する冒瀆よね。あたしに対するあてつけのつもり？」

千秋「え、そんなつもりはないけど……」

春美「世話の焼ける姉のお陰で心身疲れ果てましたって中年女みたいな顔して。そんな不景気な顔じゃ男も寄りつかないわ」

千秋「これだけ男らしい姉がいるんだから、彼氏なんて必要ないもん」

春美「失礼ね。そこら辺の安っぽいマツチョマンと一緒にしないでよ。あたしは女の究極の美を追究してるの。一人都会の片隅で世間の偏見と闘う孤高のダイエット戦士」

千秋「うん、確かに一人勝ち。さすがにもうお姉ちゃんの相手になれる人はいないと思うし……お相撲さんでも無理かも」

春美「ふん。黙って食え、小娘」

S E 再びズズズとパスタをすすする音

千秋（MO）「姉が美の革命のために部屋に引きこもって以来、確かに私は痩せた。もちろん我が家の台所事情もある。私の在宅ワークによる収入はたかが知れていて、姉がモデル時代に溜めた貯金はとっくの昔に姉の胃袋に納まっていたからだ」

S E モグモグと食べる音

千秋「でもそれ以上に、この6畳一間を埋め尽くすほどになっても食べ続ける姉の巨体を毎日眺めていると、とても食欲なんか湧かない。我が家では姉の過食症と私の拒食症が同時進行している。お姉ちゃんが太った分だけ私が痩せる。だから二人分の体重を合わせた総重量は常に一定。この法則を私は秘かに『姉妹の法則』と呼んでいる」

SE 空の食器を投げ出す音

春美「あー、まだなんか小腹が減ってるな……そうだ、千秋、デザートにピザいってこピザ！」

千秋「え、けどお姉ちゃんそれ以上食べたなら身体に悪いし……」

春美「大丈夫、ピザごときは別腹だって」

SE ポンポンと腹を叩く

千秋「でも、少しはお金も節約しないと……」

春美「何セコイこと言ってるの。古今東西、美しさの追究に金がかかるのは当たり前。クレオパトラや楊貴妃だってパトロンを騙して金巻き上げて、幻の不老長寿の薬に大枚はたいちや自分が騙されたり。いろいろ苦労してんだから」

千秋「いや、そういう歴史的な美女と比較されても……」

春美「あのね、女的美貌がどれほど歴史を変えたか知ってる？ あたしの闘いは人類史上に燦然と輝く……そうね……つまり歴史の教科書にのるぐらい意味のあることなの」

千秋「はあ……」

春美「そのうち磨き抜かれたこの豊富な肉体美で世間をあつと言わせて、ガリガリに閉鎖的な価値観に毒されたファッション界に革命を起こしてやる。いずれ大金もつかめるんだから、あんたも一緒に身上潰すぐらいの覚悟で付き合いなさいよ」

SE ガサゴソと書類を引っかき回す音

春美「えーと、宅配ピザのチラシどこやったっけ……あ、これか……トリノ・ピザ？ なんか聞いたことない店だけ。ま、いっか。ほらこれ頼んでよ」

千秋(MO)「姉はチラシを私に突き出した。注文したり、配達に対応するのはいつも私

の役目。美の革命に突入してからの姉は、余計な神経を使うと体重に触ると言う理由で決して人前には出ないのだ」

SE 携帯のプッシュ音

千秋「あ、トリノ・ピザさんですか？ えーと、マルゲリータのLサイズとシーフードとチキンのハーフ&ハーフ、トッピングは……」

千秋（MO）「姉が指し示すメニューを私は延々と注文し続けた」

SE ピンポンとチャイム

千秋「はい」

SE ドアを開ける音

和哉「お待ちせしました。トリノ・ピザです」

千秋「ご苦労さま……」

千秋（MO）「ピザを差し出す配達員を見て思わず溜息が出た……イケメン……それもかなり私のタイプ」

和哉「いつもありがとうございます。遅くなっちゃったんで、これサービスしときます」

千秋「あ、どうも……」

千秋（MO）「ジュースを手にはにかんでいるイケメン君の笑顔にドキドキした。こんな気持ちになったのはいつ以来だろう」

和哉「あ……ドリンク一本じゃ足りないですかね？」

千秋（MO）「さりげなく部屋の中を覗き込むイケメン君の言葉にハツとなった……お姉ちゃんを見られちゃダメ。あの怪物の妹と思われたら何もかもおしまいだ……私は慌ててドアの前に立ちふさがった」

千秋「いえ、一本で結構です……一人暮らしですから……」

和哉「あ、そうですか……」

千秋（MO）「どうしよう。見られたかも……」

和哉「じゃ、またよろしくお願いします」

千秋「はい……」

千秋（MO）「ドリンクを一本差し出し、爽やかな笑顔でイケメン君は去っていった……」

助かった。どうやら姉の存在には気づかれなかったようだ」

春美「何？ どうしたの？」

千秋「ヒッ！」

千秋（MO）「いきなり背後から腕をつかまれた」

春美「冷めちゃうじゃない、ピザ……あれ？ 何このドリンク」

千秋「あ、それは配達が遅くなったからってサービスで……」

春美「そう。今時の若いもんにしちゃんかなか気が利くじゃん。どれどれ……」

SE プッシュューッとドリンクの缶を開ける音

千秋（MO）「あくあ、それ私がイケメン君から貰ったのに……」

春美「カーツ、ピザにはやっぱり炭酸だねえ」

SE ゴクゴク、モグモグと飲み食いする音

春美「ほら、そんなとこ突っ立ってないで、千秋も食べなよ」

千秋「うん。私は後でいい」

春美「何だよ、遠慮すんなよ。じゃ、未来の美貌姉妹に乾杯！」

SE ケタケタと春美の笑い声

千秋（MO）「姉が太った分だけ私が痩せる。我が家の掟『姉妹の法則』は不滅だった。

このままでは近い将来、この家に私の居場所はなくなってしまうかも……」

SE カチカチとスイッチをつける音

和哉「(OFFで) ほら、つきましたよ。玄関の蛍光灯」

千秋「助かりました。どうもすみません。ピザ屋さんに電球の交換までお願いしちゃって」

和哉「いや、気にしないでください。女性の一人暮らしはいろいろと不便でしょう。毎度

ひいきにして貰ってますから、このくらいサービスしなくちゃ」

千秋「じゃ、お言葉に甘えて」

和哉「あ、忘れるところだった……はい、これ、ご注文のピザです」

千秋「確かに」

和哉「肝心のピザを忘れるようじゃ、僕も何しに来てるんだか」

千秋「本当」

SE 二人の和やかな笑い声

と、突然、背後でゴトンと物音

和哉「あれ、誰かお客さんですか？」

千秋「いえ、別に……」

千秋(MO)「イケメン君は不審げな顔で奥の部屋を窺っている……もう、お姉ちゃんた

ら！ 大人しくしててよ」

千秋「あの、ここじゃなんなんで、ちょっと外で……」

SE バタンとドアの閉まる音

千秋(MO)「慌ててイケメン君を玄関から押し出して、ドアを閉めた。何だか気まずい

雰囲気」

和哉「あ、そうだ。これ一応お近づきの印に……バイト先でやっと名刺作ってくれたんで」

千秋(MO)「気を取り直したイケメン君はポケットから名刺を取り出した」

千秋「トリノ・ピザ 矢島和哉……和哉さんって言うんですね」

和哉「で、お客さんは雨宮……春美さんですよね？」

千秋「え？」

和哉「あ、個人情報だからまずいか……すいません、配達先の登録がそうだったもんで  
すから」

千秋「あ、なるほど……」

千秋（MO）「そうだ、この部屋は姉の名義で借りているんだっけ……」

和哉「でも、春美さんって爽やかでいい名前ですよ」

千秋「いえ、まあ……」

千秋（MO）「私はあいまいに笑ってごまかした。そのとき、なぜ自分の名前が千秋だと  
言わなかったのか私にもよく分からなかった。『春美』と言う名前を和哉さ  
んが褒めてくれたせいもあったけど……」

和哉「うわー、きれいだ……」

千秋「え？」

和哉「桜ですよ。庭の」

千秋「あ、桜……」

千秋（MO）「思わずドキドキした自分が恥ずかしかった」

和哉「そうだ、今度お花見行きませんか？ 僕、いいポイント知ってるんです。河原の土  
手ですけど、桜すこいきれいなんですよ」

千秋「ええ、でも……」

和哉「あ、お客さんにいきなり何言ってるんだろう、俺。すいません厚かましくて」  
千秋「いえ、そんなことないですけど……」

和哉「でも春美さんには是非あの桜見て欲しいな。誰もいない河原にひっそりとはかなく咲  
いている感じが、春美さんのイメージにピッタリなんです」

千秋「そんな……」

和哉「無理には言いません。もし、その気になったら連絡下さい。名刺に携帯の番号も  
書いてありますから」

千秋「はい……」

和哉「それじゃ」

SE 走り去るバイクのエンジン音

千秋（MO）「イケメンの和哉さんは笑顔と共に颯爽と消えた。走り去るバイクを見つめながら、私は春の日差しのようにポカポカと暖かい気持ちに包まれていた」

SE のどかな小鳥のさえずり

千秋（MO）「でも、お姉ちゃんには絶対秘密だ……」

SE ギーツとドアを開ける音。続けてボタンとドアが閉まる

春美「遅いじゃない。何やってたの？」

千秋「ううん、別に……玄関の電球がつかなくなったから取り替えて貰ってた」

春美「千秋、あんたさあ、ピザ屋の兄ちゃんと何やってるわけ？」

千秋「え、だから電球を……」

春美「そうじゃなくて、あんた恋とかしちやってるでしょ？」

千秋「ま、まさか……何言ってるのお姉ちゃんたら」

春美「はくん、ビンゴか。今、口押さえた」

千秋「え？」

春美「あんた昔から嘘つくとき口に手をやる癖あんの。知らなかった？」

千秋「ええッ！」

春美「今頃気づいても遅いよ。で、イケメンなの、そのピザ屋の兄ちゃん？」

千秋「いや、だからそういうんじゃない……」

春美「紹介しろよ、あたしにも。彼と花見行くんだろ？」

千秋「えっ……」

千秋（MO）「お姉ちゃん、全部聞いてたんだ……」

春美「あんたの物はあたしのもの。たった二人の姉妹じゃない。水臭いね」

千秋「けどまだそんな関係でもないし……」

春美「まだ？ まだってことは将来そうなりたいていう願望を含んでるよね。恋愛沙汰に疎いあんたにしては上出来だ」

千秋「お姉ちゃん……」

春美「よし、決めた。二人で付き合おう」

千秋「え？」

春美「ピザ屋はあたしたち二人の共通の彼氏ってことでどう？」

千秋「そ、そんな……お姉ちゃん、和哉さんの顔も知らないのに」

春美「そっか、奴の名前は和哉か……ま、とにかく抜け駆けはなし。あんたがAまでいったらあたしもA。BまでいったらあたしもB。分かった？」

千秋「そんな無茶苦茶な」

春美「二人ぼっちの姉妹が一人の男を分け合う。泣ける話じゃないの。さあ、そうと決まったら祝杯だ。春美と千秋の美貌姉妹に乾杯〜！」

SE 不気味な春美の笑い声

千秋(MO)「いつもそうやってお姉ちゃんは私のことに口を出し、大事な物を奪ってき  
た……お姉ちゃんは私にとって一体何なんだろう。私を守ってくれる天使、  
それとも……悪魔？」

SE 繁華街の雑踏

千秋(MO)「街にショッピングに出かけた。アンチダイエット開始以来、すっかり出不  
精になった姉はいつもどおり家で留守番。私は久しぶりの開放感に浸って  
いた」

女子店員「これなんかお客様にとっても良くお似合いですよ。ふくよかでも品があつて」

千秋(MO)「ブティックの店員はにこやかな営業スマイルで私に春物のワンピースを勧  
めた。淡い桜色を基調に胸元にワンポイントで花びらが舞っている。和哉さ  
んとの初デートにはぴったりだ。サイズが前より小さくなったのも嬉しかつ  
た。これもある意味姉の食欲のお陰かも知れない。例の総体重一定の『姉妹  
の法則』だ」

千秋「じゃ、これいただきます」

女子店員「ありがとうございます」

千秋(MO)「暖かい春の日差しが眩しい。思わず鼻歌が出そうだ。でも、通行人はなぜ  
か私を振り返る。以前の私ならすぐにこそそと道をよけただろうが、今の  
私にはそんな見ず知らずの人の無遠慮な視線すら祝福の投げキッスに見えた。  
恋は人を変えるのだ……やっとなと和哉さんにデートの返事をする勇気が湧いて  
きた」

SE カツンカツンとハイヒールで道を歩く音。その音がピタリと止まる

千秋「あれ？」

千秋(MO)「見慣れたトリノ・ピザのバイクがアパートの前に停まっていた。それも二台並んで」

千秋「何だろ？」

千秋(MO)「部屋を見上げる男たちの不穏な空気に私は思わず塀の陰に隠れた」

店員1「(OFFで) あの部屋だろ、ほら例の和哉の……」

店員2「ああ、あの5人前のピザを注文するっていう伝説の女」

店員1「そうそう。デザートもしっかり三人前は食うっていうしな」

店員2「ウワツ、マジかよ。キモッ！ 和哉もようやるわ」

店員1「あ、おい」

店員2「あ！ ヤベッ！」

SE 走り去るバイク

千秋(MO)「私に気づいた店員たちは慌てて走り去っていった。お陰でよそ行きの爽快な気分が吹っ飛んだ……和哉さんにお姉ちゃんのことをバレたんだ……私の心に一気に暗雲が垂れ込めた」

SE ガチャリと鍵を回す音

千秋「ただいま……」

春美「遅かったじゃない」

千秋(MO)「姉は私の買い物袋をチラリと見てゴロンと横になった」

春美「自分だけ買い物？ いい気なもんだね。人には儉約しろとか言っというて」

千秋「うん……でも、しばらく外出してなかったし、春物の着る服なかったから」

春美「ふん。どうせピザ屋とのデートにでも着ていくつもりなんだろ」

千秋「そんなんじゃないくて、単なる普段着」

千秋（MO）「一応、警戒して口に手をやる癖には気をつけたが、姉は何でもお見通しだ」

SE ポリポリと何かを食べる音

千秋「ねえ、お姉ちゃん……」

春美「うん？ 何よ、あらたまって」

千秋「それ、もうヤメにしない？」

春美「何が？」

千秋「だからそれ」

千秋（MO）「私は姉の手からスナック菓子の袋を取り上げた。私への対抗意識からか姉の暴飲暴食は最近ますますエスカレートしている気がする」

春美「何すんの？ あたしはまだ革命闘争の真つ最中なの。痩せっぽちの負け犬にはなりたくないんだから」

千秋「でも、その革命は時代と逆行してるっていうか、成し遂げても誰も褒めてくれない不毛な闘いなんじゃないかな」

春美「だから、あんたみたいな凡人には選ばれた美の戦士の悩みなんか分かりっこないって」

千秋「そう思ってるのはお姉ちゃんだけなんじゃないの？」

春美「どういう意味よ？」

千秋「世間でお姉ちゃんがどう言われてるか知ってる？」

春美「革命に身を捧げることに悔いはないわ。偉大な英雄は死んだ後に評価されるものなの。言いたい奴には何でも言わせておけばいいじゃない」

千秋「私、もう、そういうお姉ちゃんについていけない」

春美「別について来いなんて言ってるじゃないよ。だけど、あたしどんな手段使ってもあんたには負けないから」

千秋「何で私との勝負になるの？ 問題は世間体でしょ」

春美「とにかくあたしは予定通り食べて食べて食べて食べまくって、美しさにさらに磨きを掛けて和哉を落とすから」

千秋「お姉ちゃん……」

SE ガツガツと何かを食べる音

千秋（MO）「鬼気迫る表情でむさぼり食う姉を見て恐くなった。このままじゃお姉ちゃんに全部食べられちゃう。和哉さんとの恋も、あたしの夢も……」

千秋「お姉ちゃん！」

春美「な、何なのよ。おっかない顔して」

千秋「あたしも食べる！」

SE ガツガツと咀嚼音

春美「お、ついに本性をむき出したか……だけど妹風情には負けられない。こっちには美の革命っていう大義名分があるんだ」

SE むさぼり食う咀嚼音が大きくなる

千秋（MO）「あたしだって負けない。お姉ちゃんに比べたら、まだまだ痩せ過ぎなんだから。もっと食べて健康美に輝く美貌を手に入れなきゃ」

春美「あ、おい、千秋、それあたしの分だろ」

千秋「いいの。お姉ちゃんは食べ過ぎ」

SE 食べ物を奪い合って食べ続ける二人の嬌声

千秋（MO）「ガマンしないで思いっきり食べるのは快感だ。姉が病み付きになったのも分かる気がする。でも、このまま二人で食べ続けると、我が家を影で支配してきた不滅の掟、『姉妹の法則』の微妙なバランスが崩れていく……そんな予感がした」

SE 小川のせせらぎ

千秋「ああ、きれいな桜……こんな素敵な場所を教えてくれてありがとう。和哉さん」

和哉「喜んで貰えて良かった。やっぱりここは春美さんにピッタリな場所だ」

千秋（MO）「和哉さんとの初デートの日。私は幸福な一時を過ごしていた。こんな日が一生続けばいいのに……和哉さんに『春美』ってお姉ちゃんの名前で呼ばれたままでもいいから……」

千秋「でも、本当に誰もいないんですね」

和哉「そう。ここを選んだ本当の目的は君と二人きりになりたかったからなんだ」

千秋「え？」

和哉「いや……その服とっても似合ってる」

千秋「ありがとう……」

千秋（MO）「和哉さんの手が私の胸元に伸びて、服の花びらに触れた」

千秋「あの、ね、和哉さん……」

和哉「うん」

千秋「私の家族の話、少ししてもいい？」

和哉「家族？」

千秋「そう。両親はずいぶん前に亡くなったんだけど、私には姉が一人いるの」

和哉「お姉さんが……」

千秋（MO）「和哉さんが春美お姉ちゃんのことを知っているかどうか確かめるのは恐かった。でも、それを隠したままでは和哉さんとの距離はもうこれ以上縮まらない」

千秋「一人暮らしって言ったけど……実はあれ嘘」

和哉「え？」

千秋「姉と一緒に住んでるの」

和哉「……そ、そうなんだ」

千秋「それに私の名前は千秋。春美はお姉ちゃんの名前」

和哉「え……」

千秋（MO）「私は姉と私のことを全て話した。別にお姉ちゃんに抜け駆けして気が咎めたとかじゃなくて、和哉さんに隠し事続けるのが嫌だっただけだ」

千秋「いろいろ隠しててゴメンなさい。なんか言うタイミングを逃しちゃって……でも、

和哉さんには本当のことを全部知って欲しかったから」

和哉「うん……」

千秋「どうしたの？ 顔色が悪いみたいけど」

和哉「いや……大丈夫……」

千秋（MO）「和哉さんはひどく驚いた様子でじっと考え込んでいた。やっぱりお姉ちゃんの話さな方が良かったのか。そんな怪物の存在に耐えられるほど和哉さんは強くなかったのか……青ざめた和哉さんの横顔を私は不安な気持ちで見つめていた……」

SE 雨の降る音

千秋（MO）「その不安はやがて現実のものとなった……」

配達員1「（OFFで）毎度お、トリノ・ピザです」

千秋「ご苦労さま」

SE 走り去るバイク

春美「あれ、今日も配達はいケメンじゃないんだ」

千秋（MO）「姉のひと言にギクリとした……あの日以来和哉さんには一度も会っていない。二、三度電話したがずっと留守電だった。その後も姉に命じられるまま、三日に一度はトリノ・ピザに注文しているが、配達はいつも別の人だ……」

春美「どうしたんだろ？ 風邪でも引いたのかな。それとも配達途中で事故ったとか？」

千秋（MO）「人の気も知らないで……無神経な姉に無性に腹が立った」

千秋「あたし、ちょっと買い物に行ってくる」

春美「ああ、お願い。ピザだけじゃ飽きちゃうし、アツアツの揚げ物とか適当に見繕ってきて」

SE バタンと閉まるドア。強まる雨の音

千秋（MO）「この期に及んでまだ食欲があるのが憎らしかった……私の恋はお姉ちゃん  
のせいだ……」

SE 車のクラクション。街の雑踏

千秋（MO）「和哉さんからもらった名刺を握りしめ、私は雨の中トリノ・ピザに向かった」

SE 大粒の雨が傘に当たっている

店員1「（OFFで）おい、和哉、三丁目の山田さんな。急いで」  
和哉「はい」

SE バイクのエンジン音

千秋（MO）「和哉さんだ！……和哉さんのバイクがまっすぐ私の方に向かってきた。どうしよう……」

SE アクセルをふかして走り去るバイク

千秋「和哉さん……」

千秋（MO）「バイクはスピードを上げて私の前を通り過ぎていった。でも、その瞬間、確かに和哉さんはヘルメット越しに私を見た……和哉さんは雨の中に立ち尽くす私に気がついたはずだ。それなのに……大粒の雨が止めどなく頬を滑り落ちていった」

SE 強くなる雨音とFO。天ぷら油のはじける音がシンクロする

店長「千秋ちゃん、明日、公民館の会合で大口の注文入っちゃった。残業頼めるかな」

千秋「はい。大丈夫です」

店長「悪いね。来月から時給アップするからさ。あ、それとまたお総菜好きだけ持って帰っていいから」

千秋「ありがとうございます」

千秋（MO）「近所のお弁当屋さんでバイトを始めた。僅かなバイト代は我が家の逼迫した家計には焼け石に水だったが、総菜の残り物をお土産に貰えるのが嬉しかった。女の意地を賭けた革命に没頭し、最近ますます増している姉の食欲をまかなうにはピッタリのバイトだ……そして、何よりも和哉さんを忘れてい

られることが大きかった」

SE ビューと吹き付ける風の音

千秋 (MO) 「その晩は台風が近づいていた」

SE カツカツと急ぎ足の靴音

千秋 「あー、残業ですっかり遅くなっちゃった。お姉ちゃん、お腹すかせてるだろうな……」

SE バイクのエンジン音

千秋 (MO) 「角を曲がるバイクの後ろ姿に私はハツとなった……見間違えるはずはない。和哉さんだ！……でも、今さらどうして私の前に現れたの？」

SE 遠ざかっていくバイク

千秋 (MO) 「この辺りでトリノ・ピザを頼むのは我が家ぐらいだから、お姉ちゃんが注文したのだろうか。いや、それはありえない。姉はどんなにお腹が減っていても自分で電話することはなかった。それじゃ、私を避けていたはずの和哉さんがなぜウチの近所をうろついていたんだろう……なんだか胸騒ぎがした」

SE 風の音が強くなる。ガチャンとドアを開ける音

千秋 「ただいま……ゴメンね、遅くなって……」

千秋 (MO) 「外の台風が嘘のように家の中はひっそりと静まりかえっていた」

千秋 「お姉ちゃん、いないの？」

SE バタバタと廊下を歩く音。続いてドアが開く

千秋 「お姉ちゃん……」

春美 「ああ、千秋か……お帰り」

千秋（MO）「ベッドに横になっていた姉は、寝そべったまま私をチラリと見た」

千秋「なんだ。いるんだったら返事ぐらい……」

千秋（MO）「上目遣いに私を見上げる姉の服に気づいてギョツとなった。それは箆筒の奥にそっと仕舞ってあった和哉さんの好きな服。その可憐な桜色のワンピースから姉の丸太のような手足が突き出ていた」

千秋「お姉ちゃん、それ……何であたしの服着てるの？」

千秋（MO）「姉のはち切れんばかりの巨体に耐えきれず、服は無惨な悲鳴を上げていた……和哉さんとの淡い思い出も一緒に張り裂けそうだった……」

春美「ピザ屋の兄ちゃん、この服気に入ったんだろ」

千秋「え？ 何のこと……」

春美「とぼけても無駄。二人共通の彼氏なんだからあたしにだって着る権利はあるでしょ。まあ、抜け駆けした罰が当たったってとこかな」

千秋（MO）「不気味に微笑みながら、姉は私に便せんを差し出した」

千秋「な、何これ？」

春美「ピザ屋からの手紙。読んでみりゃわかるだろ」

千秋「まさか人の手紙読んだんじゃ……てゆーか、そもそも何でお姉ちゃんが和哉さんの手紙持つてるのよ！」

春美「知らないって。さっきポストに入ってたんだってば」

千秋（MO）「私は慌てて手紙を開いた……手紙にはごくごく簡潔に別れの言葉が書かれていた」

千秋「……お姉ちゃんのせいよ……」

春美「え？」

千秋「全部お姉ちゃんのせい！」

春美「何言ってるの？」

千秋「だって、お姉ちゃんのことと和哉さん私から離れていったんだもん」

春美「ちょっと、自分が振られたからって変な言いがかりつけるのやめてよ」

千秋「お姉ちゃんみたいにブクブク太った怪物が姉だって分かったら、誰だって逃げ出すに決まってるじゃない！」

春美「だったら何なのよ！ ピザ屋ごときにフラれた可哀想な妹だと思って下出に出てればつけあがって」

千秋「(涙声) 何が美の革命よ。その革命のために私がどれだけ苦労してきたか……お姉ちゃんさえいなければ……お姉ちゃんなんかもういらぬ……」

千秋(MO)「もう限界。涙が止まらなかった」

春美「……分かったわよ。あたし、この家出て行く」

SE ミシミシと春美の歩く音

千秋の嗚咽する声

春美の足音がピタリと止まる

春美「……一応報告しとくけど、あたしあいつと寝たから」

千秋「えっ……」

千秋(MO)「頭の中が真っ白になった……青白い和哉さんの横顔。私から視線をそらす瞳。バイクで走り去る背中……いろんな景色がグルグルと頭の中を渦巻いては消え、やがて一つに重なり合った……やっぱりお姉ちゃんは悪魔だ。私から全てを奪い尽くす悪魔なんだ！」

SE バタバタと走る音

千秋(MO)「ほとんど無意識に台所の包丁を握りしめていた。いつかこんな事になりそうなる予感があった……でも、悪いのはお姉ちゃんだ」

M 勇ましい行進曲が鳴り出す

春美「千秋、な、何のつもり……そんなもの持ち出して」

千秋「お姉ちゃんさえいなければ……お姉ちゃんさえいなければ……」

千秋(MO)「私はうわごとのように同じ言葉を繰り返していた」

春美 「千秋、分かっている？ あんたはあたしがいなきや生きられないの。あんたはあたしの分身なのよ！」

千秋 「私にはお姉ちゃんなんかいららないッ！ これは私の革命なの！」

SE ズブツ！ という鈍い音

続けて春美のけたたましい悲鳴

ズブツ、ズブツと何度も突き刺さる包丁

春美 「だから……あたしとあんたは……二人で一人の……姉妹……」

千秋 (MO) 「気がついたら姉は血まみれで目の前に横たわっていた……でも、不思議と姉を手にかけて罪悪感はなく、むしろほっと安心している自分がそこにいた……とにかくけじめだけはつけなきゃ……私は受話器を取った」

千秋 「警察ですか……今、姉を殺しました……」

千秋 (MO) 「一気に心地よい疲労感が全身を包んだ……とにかく眠りたい……ぐっすり……と……」

M FO

SE 鳥のさえずり

千秋 (MO) 「目を覚ましたのは病院のベッドだった……」

刑事 「お、やっと目が覚めましたか……」

千秋 (MO) 「白衣の看護師さんと並んで私を見つめている顔に見覚えがあった。多分、私を救急車に乗せてくれた刑事さんだ」

刑事 「ずいぶんお待ちしましたよ。それで、体調の悪いところ申し訳ないんですが、少しお話を聞かせてもらえますか？」

千秋 「……ええ。構いませんけど」

千秋（MO）「覚悟は出来ていた。私は春美姉ちゃんを殺した犯人だ。自分の犯した罪はきつちり償おう」

刑事「それじゃ、ちょっと……」

千秋（MO）「刑事さんが目配せすると看護師さんは部屋から出て行った。入れ替わりに入ってきた男の人を見て私は絶句した……」

千秋「和哉さん……」

千秋（MO）「和哉さんは私の顔を探るような目で恐る恐る見ていた」

刑事「いや、びつくりさせちゃってごめんなさい。あなたの部屋に手紙と名刺があったもんですから参考までに来てもらったんです」

千秋（MO）「刑事さんは鋭い目付きで、私と和哉さんの顔を代わる代わる見ている」

刑事「ところで矢島和哉さん。あなたは雨宮春美さんの家に何度か行ってますね」

和哉「ええ、仕事柄ピザの配達には何度も」

刑事「いや、それだけじゃないはずだ……」

千秋（MO）「刑事さんは、ポケットからビニール袋に入った何かの部品のようなものを取り出した」

刑事「これは、春美さん宅の玄関の蛍光灯の傘に取り付けられていた小型カメラです。矢島さん、これに見覚えがあるでしょうか？」

和哉「……いい、いえ……」

千秋（MO）「え、ウチの玄関にカメラ？ 刑事さんは何を言ってるんだろう……和哉さんも何故だかブルブルと手を震わせているし……」

刑事「それはおかしいな。このカメラからはあなたの指紋が発見された。これはあなたのものじゃないですか？」

和哉「……はい……すみません……私のです」

刑事「なぜこんなものを春美さんの家に仕掛けたんですか？」

和哉「そ、それは……」

刑事「矢島さん、あなたには婦女暴行の前科があるね」

和哉「……ええ……」

刑事「盗撮目的なんだろう？」

和哉「……すいません、出来心です……かなり特殊な女の人だったんで興味本位で……」

千秋（MO）「和哉さんはガツクリとうなだれた……ショックだった。和哉さんがそんな

人だったなんて……」

刑事「それで春美さんの死体をどこへやったんだ？」

和哉「死体って……何のことですか？」

刑事「ここまできて白を切るのか。千秋さんはあなたを庇ってお姉さんを殺したとまで言ってるんだぞ」

和哉「ええッ！」

千秋「違います！ 庇ってなんかいません。姉は本当に私がこの手で殺したんです！」

刑事「だけど部屋には春美さんの死体はなかった……あるのは刃物でズタズタにされた巨大なテディベアのぬいぐるみだけだ」

和哉「あ、ありました。確かにそのぬいぐるみはカメラにも映ってました。でも千秋さんはいつも一人ででした。一人で食事しながら、そのテディベアに向かって話しかけてました」

千秋「嘘ッ！ お姉ちゃんはいつも私と一緒にだった」

和哉「違う！ だから……だから、それなんだ。あなたが恐くなって逃げた理由は……あなたには一緒に住んでる姉なんかいないんだ」

千秋「だって和哉さん、あなたはお姉ちゃんと……」

千秋（MO）「和哉さんを見損なつてた。お姉ちゃんとあんな関係にまでなっておきながら……それじゃお姉ちゃんがあんまり可哀想」

和哉「刑事さん、間違いありません。俺が興味を持ったのはこの千秋さんの豊富な肉体なんです。春美さんのことは知りません。信じて下さい」

千秋（MO）「今さら私に興味があつたなんて白々しい。そもそも私のどこが豊富なのに……」

春美お姉ちゃんに栄養を吸い取られてガリガリの身体なのに……」

刑事「うーむ、一体……どういふことだ？」

千秋（MO）「刑事さんは、ベッドに横たわった私の身体をジロジロ眺めながら、腕を組んで考え込んでいた。そこへ若いもう一人の刑事さんが部屋に入ってきて、何か耳打ちした」

刑事「な、何？ DNAは一種類しか検出されず、戸籍上には春美さんしか存在しないだ  
と？ そんなバカな。じゃ、ここにいる千秋さんはいったい……」

千秋（MO）「部屋にいるみんなが顔を見合わせ、それから気味悪そうにゆっくりと私を見た……え？ 私の正体？ 私が春美お姉ちゃんじゃなかったって疑ってるの？ やめてよ。私は妹の千秋だってば。こんなに痩せてるのにあんなお姉ちゃんと一緒にしないでよ……そんなことよりお腹がペコペコ。だって、お姉ちゃんが消えて体重がゼロになった分、これからは私が二人分食べて、もつともっと大きく美しくならなきゃいけないだもん。それが『姉妹の法則』。未来永劫、我が家の不滅の掟だから……」

（了）